東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

ベートーヴェンのコントラファゴット・パート：「第九」を含む3作品に見られる特徴の比較をとおして

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 保崎, 佑, Hozaki, Yu メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1427

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

ベートーヴェンのコントラファゴット・パート

―「第九」を含む3作品に見られる特徴の比較をとおして―

保崎　佑

はじめに

コントラファゴット（英：*Contrabassoon*）はファゴットの1オクターヴ低い音域を持つ木管低音楽器であり、その楽器の成り立ちなどの起源を明確に示す証拠は少ない。一般的にコントラファゴットという楽器は、17世紀半ばに開発されて誕生したと言われており、長大なファゴットの形で3鍵であったとされているが、15世紀から16世紀のショーム・バンド[1]やグランド・ポマー[2]などを起源とする説があり、当時のオーストリアのマーチング・バンドでそのような楽器が使われていたとも言われている（Krüger 2007: 291-292）。安定的に大きな音を出すことが出来る現在のコントラファゴット[3]と比べて、管体の折り曲がりがなく大きな直線の管を束にしているだけであるため、ピュアな音を持っているが非常に演奏自体が難しく、音域によっては雑音的な音が混ざって出てしまう。

コントラファゴットが使われる最も古い作品例はヨハン・セバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach（1685-1750）が1724年に初演した《ヨハネ受難曲》であり、1749年の第4稿にコントラファゴット（*Bassoono grosso*）が追加されている。その後のレパートリーとしては、ゲオルグ・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Händel（1685-1759）の《王宮の花火の音楽》、

---

[1] ショーム（英：*Shawm*）はヨーロッパで13世紀から16世紀にかけて作られ演奏された、ルネッサンス期のダブルリード木管楽器である。

[2] ポマー（英：*Pommer*）はルネサンス期の演奏に使用されていたダブルリード木管楽器である。音域は1オクターヴ半ほどであったため、合奏する場合音域をカバーするためにアルトやバスなど大小の楽器が存在した。

[3] 現在のコントラファゴットの音域は3オクターヴと広く、キィーの改良が現在でも進んでいる。近年ではコントラフォルテ（独：*Kontraforte*）という改良型の楽器が用いられている。最低音は通常のコントラファゴットよりも半音低いイ音、音域は4オクターヴ半に及び、高音域が痩せる傾向にある通常のコントラファゴットに対して全音域通してほぼ一様の音質になる。また、ダイナミクスレンジが通常のコントラファゴットよりも広い。

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン Franz Joseph Haydn（1732-1809）の《天地創造》。交響曲での初出はルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン Ludwig Van Beethoven（1770-1827）の交響曲第5番「運命」の最終楽章であり、彼はその後、交響曲第9番と歌劇《フィデリオ》でもコントラファゴットを編成に入れた。この3作品を概観してみると、コントラファゴットの使い方にそれぞれ特徴があることがわかる。

そこで本稿では、交響曲第5番「運命」の最終楽章、交響曲第9番の最終楽章と歌劇《フィデリオ》を考察対象とし、各作品のコントラファゴット・パートを比較することによって、ベートーヴェンがこの3作品を通してどのようにコントラファゴットを扱っているのか、またコントラファゴットに何を求めていたのかを明らかにする。

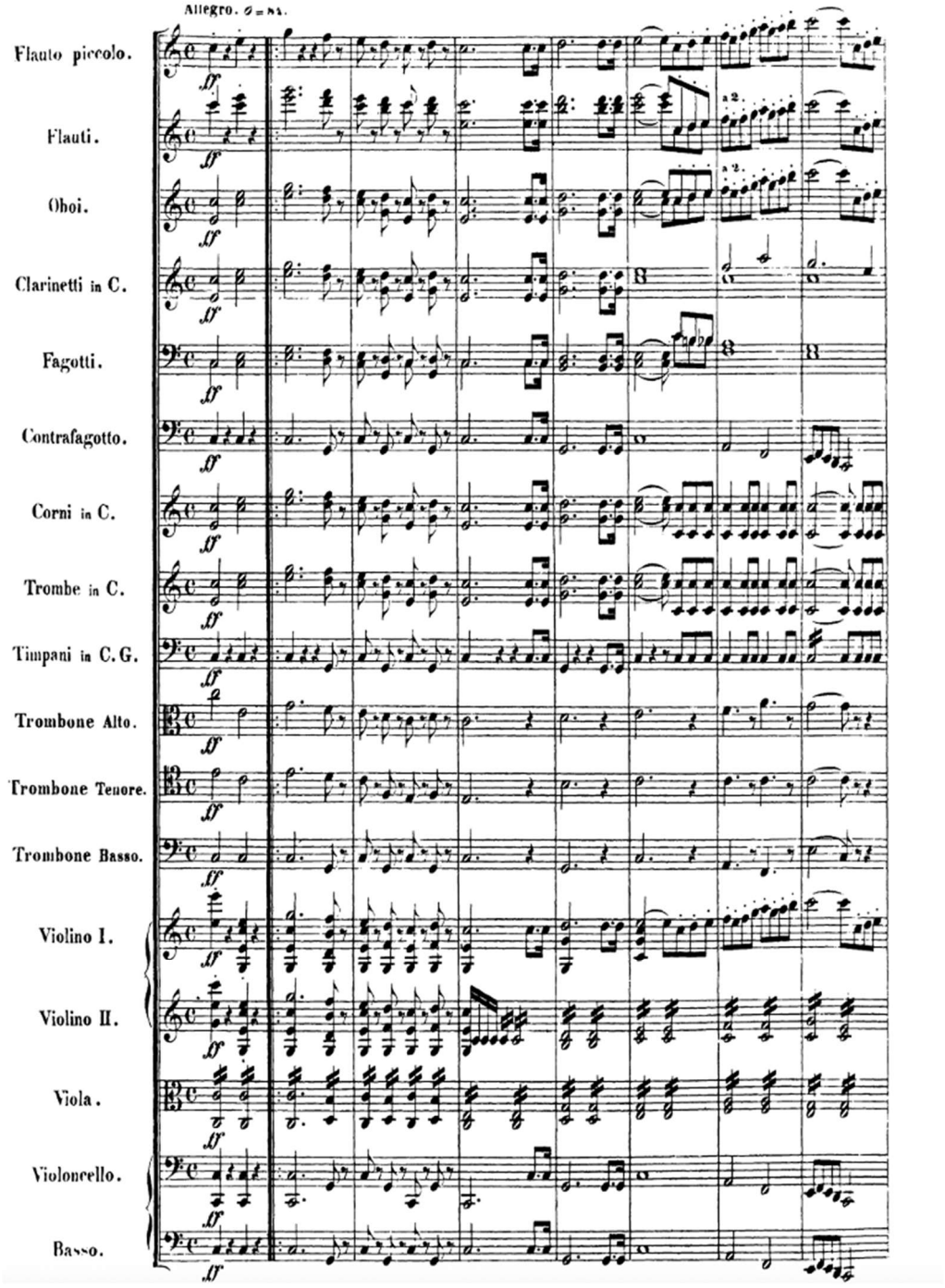
1. 交響曲第5番「運命」のコントラファゴット・パート

ベートーヴェンは交響曲第5番で、史上初めて交響曲にピッコロ、コントラファゴットとトロンボーン（アルト、テナー、バス各1名）を編成に取り入れた。当時の管弦楽においていわゆる「珍しい楽器」だったこれらの楽器が後にオーケストラの定席を占めるようになっていったことを考えると、後の管弦楽法に影響を与えたという点で非常に興味深い作品の一つであると言える。

全4楽章で構成されるこの作品は、最終楽章でピッコロ、コントラファゴットとトロンボーンが加わり、色彩的な管楽器が増強され他の楽章に比べて響きが非常に華やかになっている点が特徴的である（譜例1参照）。コントラファゴット・パートに注目をしてみると、ファゴット・パートとではなく、基本的にはバス・パート *Basso*、すなわちコントラバス・パートと同じ音を終始演奏していることがわかる[4]（譜例2参照）。これは、この曲におけるコントラファゴット・パートの1番の特徴と言っていいだろう。

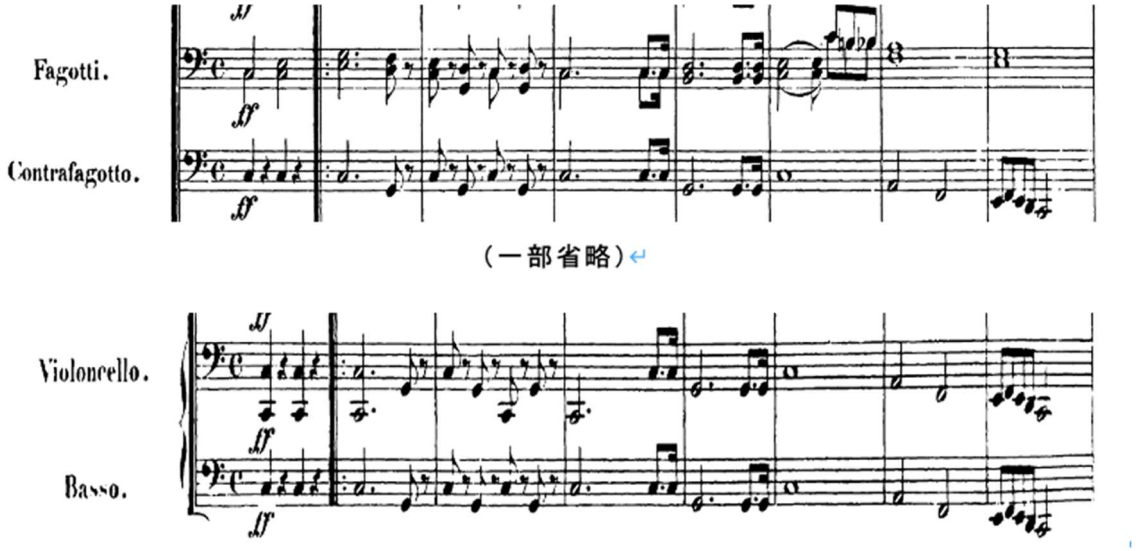
[4] 自筆譜の16段目の声部、すなわち低音声部にはコントラファゴット *Contrafag* という書き込みがある。

譜例 1 （第 4 楽章冒頭）



(Beethoven [1862]: 52)

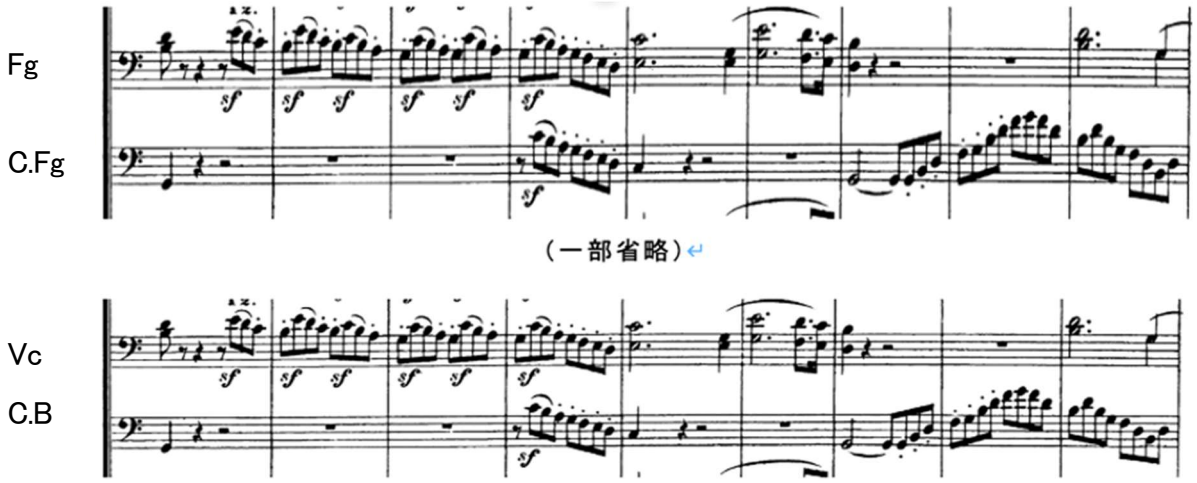
譜例 2 （第 4 楽章冒頭の Fg, C.Fg, Vc, Basso）



(Beethoven [1862]: 52)

コントラファゴット・パートの技巧的と言える箇所を挙げるとするならば、第 28 小節目から第 31 小節目のアルペジオであり、コントラファゴットが最高音の g1 まで 2 オクターヴ一気に駆け上がる部分である（譜例 3 参照）。

譜例 3 （第 22〜30 小節）

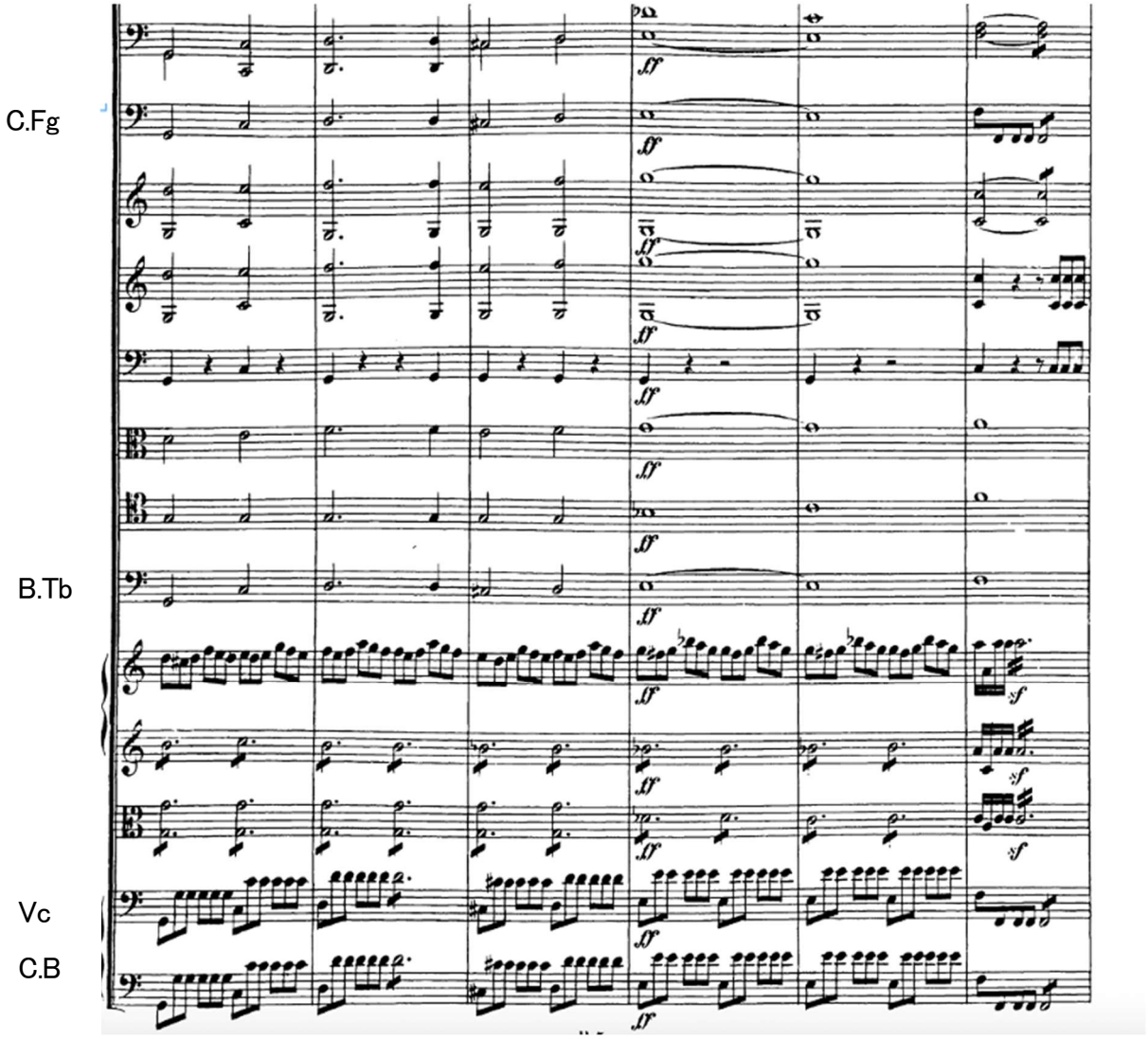


(Beethoven [1862]: 55)

最終楽章全体を通してコントラファゴット奏者は、最低音 C から最高音 g1 でという広い音域を演奏しなければならないが、基本的に 8 分音符で 3 度から 6 度までの跳躍がほとんどであるため、コントラファゴットにとって困難なパッセージはほとんどなく、1 オクターヴの跳躍も第 41 小節目と第 250 小節目にしか出てこない。

唯一コントラファゴット・パートがコントラバス・パートと異なる動きを持つ箇所は、第 303 小節目から第 307 小節目である。この部分ではコントラバス・パートが三連符を演奏しているのに対して、コントラファゴットがバストロンボーン・パートと同じ動きをする（譜例 4）。

譜例 4 （第 375～380 小節）



(Beethoven [1862]: 88)

この動きをバストロンボーンの１オクターヴ下の音域で演奏しているのはコントラファゴット・パートのみであり、コントラファゴットの音が目立つ部分でもあると言える。

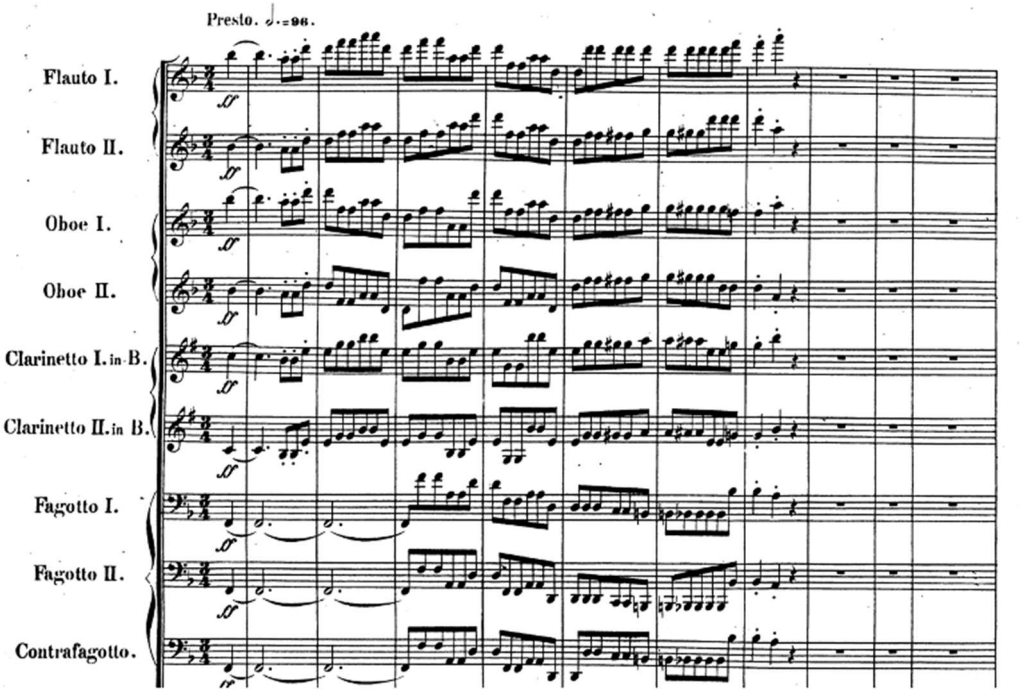
以上の特徴を踏まえてこの作品のコントラファゴット・パートを概観してみると、基本的にはコントラバス・パートと同じ音を常に演奏しており、低音声部の補強のためにコントラファゴットが用いられていると言えるだろう。譜例4のようにコントラファゴットでもって音域の拡大が特徴付けられている部分がある点で、管弦楽法の発展の上で注目すべき作品であると言えよう。

2. 交響曲第9番のコントラファゴット・パート

当時、奇抜的なアイデアだったとされる声楽を伴うこの交響曲の基本的な編成は2管編成であるが、交響曲第5番「運命」と同様にピッコロ、コントラファゴット、トロンボーン（アルト、テナー、バス各1名、第2楽章、第4楽章）が追加される。また、ホルンが4本、打楽器はそれまでの交響曲では使われてこなかったトライアングル、シンバル、バスドラムが追加されており、この時期の交響曲の編成としては最大級であると言える。

自筆譜の低音声部を見てみると、基本的には*Basso*としか記されていない。つまり、現代のコントラファゴット・パート譜に書かれている内容は、自筆譜からだけでは確認することが出来ない。しかし、ベートーヴェンが写譜師用に作成した指示書には、最終楽章でコントラファゴット*Contrafag*がどこで何を演奏するか指示があり、「コントラファゴットは最終楽章のみ*beim Finale erst Contrafag*」という書き込みから、コントラファゴットが最終楽章で用いられることが確認できる。しかし、「コントラバス・パート」と「コントラファゴット・パート」との分離はいかなる理由によるものなのか記されていない。最終楽章冒頭のコントラファゴット・パートはコントラバス・パートと異なる役割を担っている（譜例5参照）。

譜例 5（第 4 楽章冒頭）

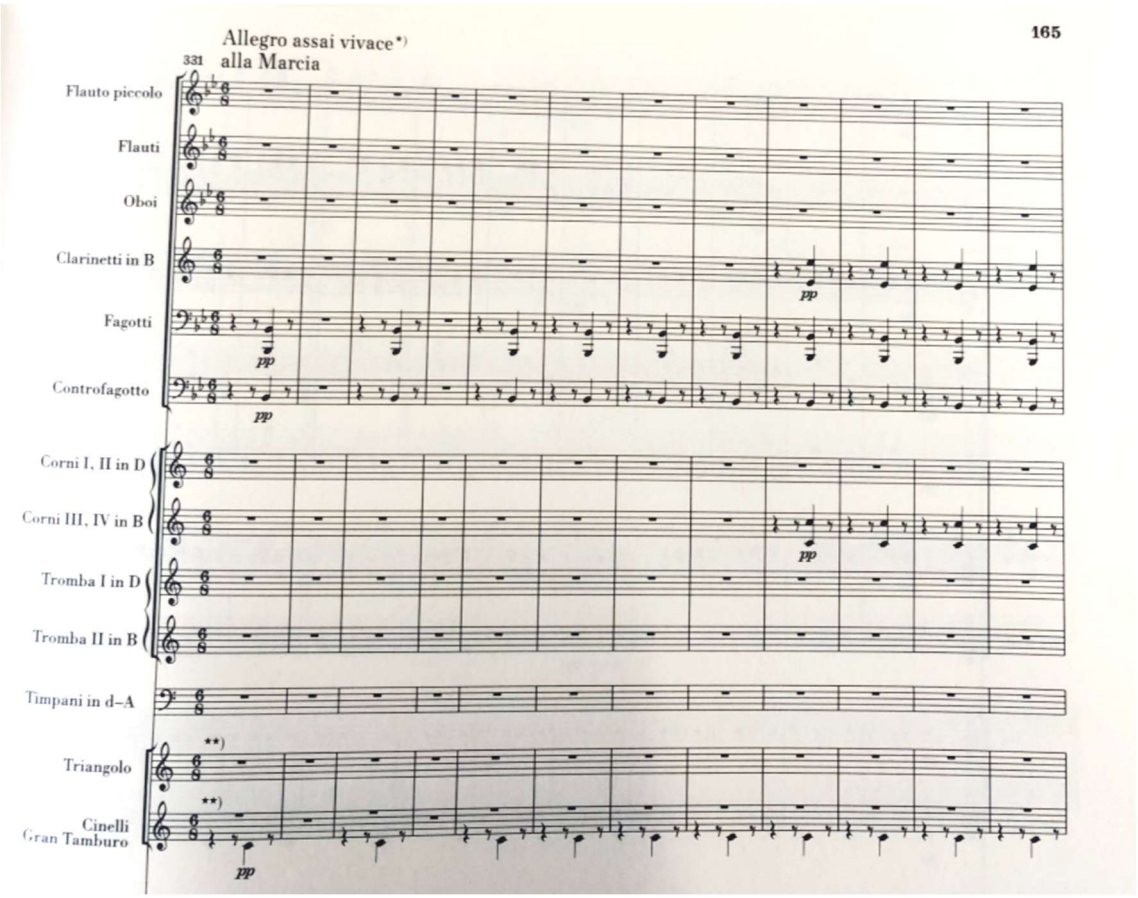


(Beethoven [1863]: 171)

第 2 ファゴットの 1 オクターヴ下の音を演奏しており木管楽器セクションの最低音を担当している。この時点で交響曲第 5 番「運命」のコントラファゴット・パートの扱い方と違うことがわかる。

コントラファゴットの音色を生かしている箇所を挙げるとするならば、第 331 小節のマーチの部分である。ここでのコントラファゴット・パートはファゴットセクションとして扱われており、マーチング・バンドでダブルリードの低音楽器を用いる伝統的な雰囲気を出すことが目的であったと推測できる（譜例 6 参照）。このマーチの部分のコントラファゴットは Bärenreiter（1996 年版）の出版譜では、マーチ部分の最低音である B2 の音が記譜されており、ファゴットセクションは 2 オクターヴで演奏されている。しかし、当時の年代に B2 まで音が出る楽器が現存していたという校訂報告などはない。従って 1996 年版の場合、コントラファゴットの最低音が目立つように聴こえる。しかし、Henle（2020）の新全集では、同部分のコントラファゴットの最低音は B2 ではなく B1 となっている。しかし、その理由も校訂報告書にはない。

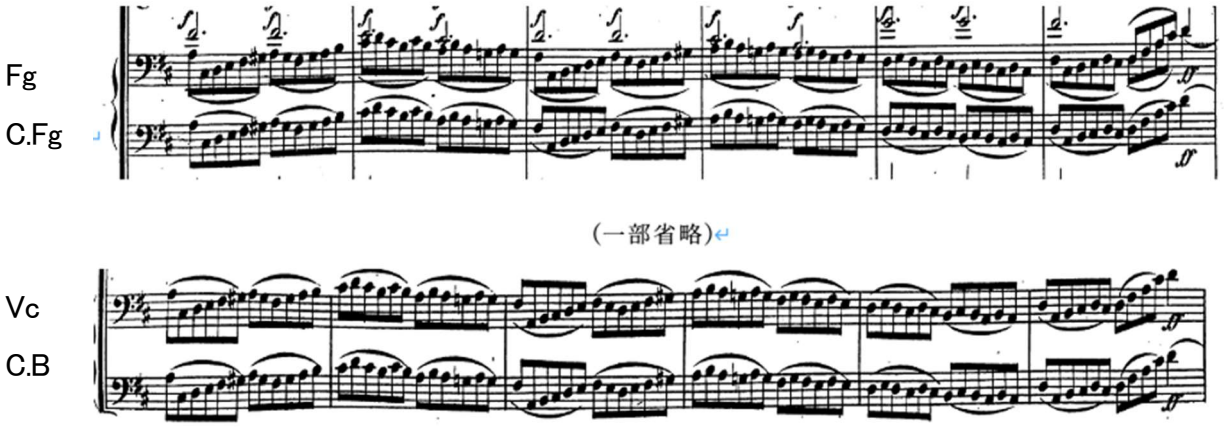
譜例 6 （第 331～342 小節） 新全集 Henle（2020）



(Beethoven 2020: 165)

この作品のコントラファゴット・パートは交響曲第 5 番「運命」より全体的に技巧的である。最も難しいとされている箇所は第 663 小節目から第 717 小節目まで続く連符であり、非常にテンポが速いため現在の楽器でも指使いに苦労する箇所である（譜例 7 参照）。コントラファゴットが入ることによってファゴットセクションと低弦セクションのオクターヴ音程が対等になる。

譜例 7 （第 665～670 小節）



(Beethoven [1863]: 242)

交響曲第 5 番のコントラファゴットが、基本的にコントラバスと同じ動きをしていたのに対して、交響曲第 9 番のコントラファゴット・パートは、木管楽器セクション、ファゴットセクション、そして低弦セクションといった複数の異なるセクションとその時々に応じて、共に演奏する。より技巧性も高く、様々な性格を持つこの最終楽章においてコントラファゴットがこの様に活用されていることは、大きな特徴であるといえよう。

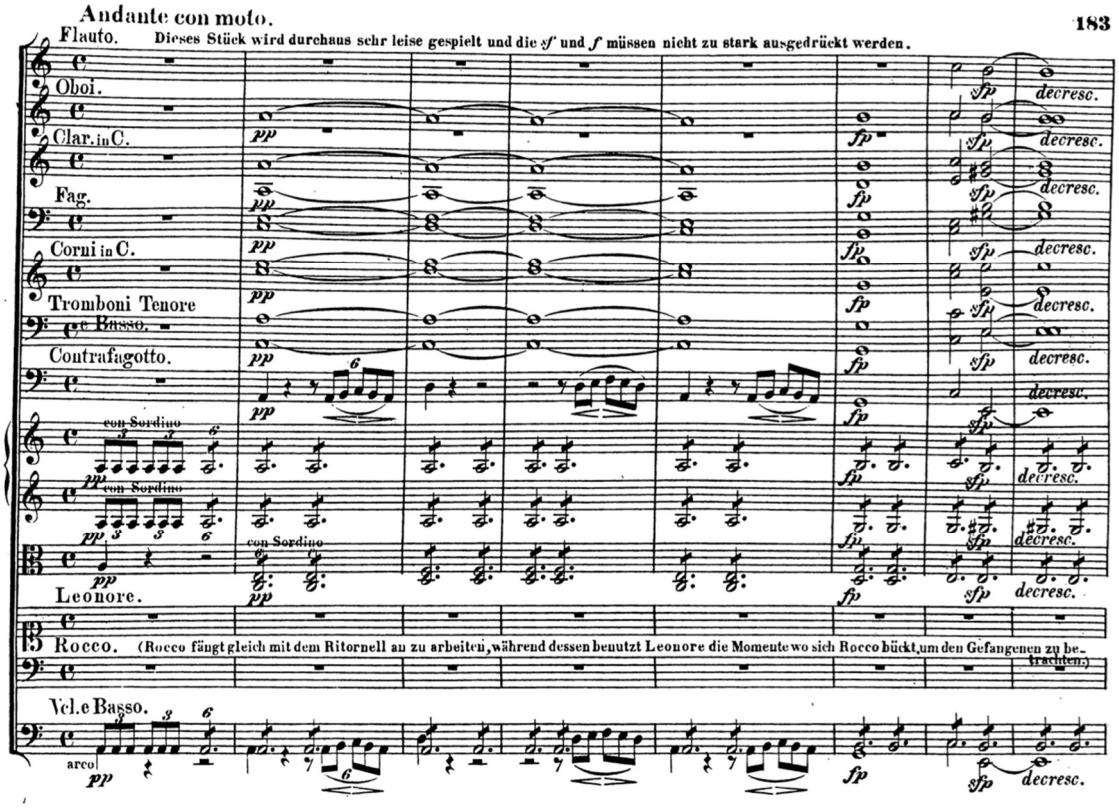
3. 歌劇《フィデリオ》のコントラファゴット・パート

ベートーヴェンは数回の改訂を経て書き上げた自身のオペラ《フィデリオ》でもコントラファゴットを編成に加えている。しかし、この作品ではコントラファゴットは、第 2 幕の第 12 番のレオノーレが墓穴を掘る場面のみで用いられる（譜例 8 参照）。

コントラファゴット・パートはコントラバス・パートと同一のパッセージを演奏しているが、コントラファゴットの重低音が効果的に扱われており、この場面における不気味さをより強く表現している。実際に、その後コントラファゴットの重低音は、ロマン派以降のさまざまな作

品において、特定のキャラクターを表現するために用いられ、さらに現代に至るまでの映画音楽などでも広く多用されることとなった[5]。

譜例 8 第 2 幕の第 12 番



(Beethoven [1864]: 183)

まとめ

今回の比較考察により、ベートーヴェンの 3 作品のコントラファゴット・パートの扱われ方がそれぞれ全く異なっていたということが明らかになった。その内容は、以下のように整理できる。

・1808 年（交響曲第 5 番「運命」）　　低音声部の補強、コントラバス・パートと同型

[5] 代表的な作品例として「ゴジラ」（1954）や「ジョーズ」（1975）が挙げられる。

・1810 年（歌劇《フィデリオ》）　　コントラバス・パートと同型、コントラファゴットの音色を特定の場面で活用する

・1824 年（交響曲第 9 番）　　低弦セクション、木管楽器セクション、あるいはファゴットセクションとして扱われている。

このように見てみると交響曲第 5 番「運命」では、コントラファゴットが低音声部の補強として扱われているのに対して、交響曲第 9 番ではコントラファゴットがファゴットセクションとして扱われている部分が多い。歌劇《フィデリオ》では、特定の場面にだけコントラファゴットの音色を効果的に用いている。《フィデリオ》を作曲した 1810 年、すなわちベートーヴェンが交響曲第 9 番を初演する 14 年前の時点で、コントラファゴットの音色を効果的に生かしている点は非常に興味深い。《フィデリオ》における音色上の試みの後に、ベートーヴェンが交響曲第 9 番でコントラファゴットを取り入れたことは、後の音楽家による交響曲の作品に重要な影響を及ぼしたとも考えられる。なぜならこの作品以降、時代の流れとともに管弦楽曲でコントラファゴットが扱われることが増え、ヨハネス・ブラームス Johannes Brahms（1833-1897）の交響曲第 1 番（1876）では複数の楽章でコントラファゴットが使われるようになり、さらに、より技巧的で音楽的な演奏をコントラファゴット奏者が求められるようになってくるからである。さらに時代が進めば、コントラファゴット・パートに Solo が与えられたり、コントラファゴットが 2 本も必要となる作品が演奏される。その意味でベートーヴェンの交響曲第 9 番は、管弦楽におけるコントラファゴットの扱い方の変化を示す重要な作品であると言うことができよう。

参考文献表

Beethoven, Ludwig van

[1862] *Beethoven Symphonie Nr. 5 in c-moll.* Plate B. 5 (Leipzig: Breitkopf und Härtel)

[1863] *Beethoven Symphonie Nr. 9 in d-moll.* (Leipzig: Breitkopf und Härtel)

1996 *Beethoven Symphonie Nr. 9 in d-moll,* herausgegeben von Jonthan Del Mar (Kassel: Bärenreiter)

2020 *Beethoven Symphonie Nr. 9 in d-moll,* herausgegeben von Beate Angelika Klaus. Beethoven Werke Gesamtausgabe, Abteilung I, Band 5 (München: G. Henle Verlag)

Del Mar, Jonathan

2010 "commentary." *Sinfonie no. 9, op. 125 : Autograph, Staatsbibliothek zu Berlin, Preussischer Kulturbesitz, Beethoven-Haus Bonn, Bibliothèque nationale de France,* 36 (Kassel: Bärenreiter)

Krüger, Walther

1995 "Fagott." *Die Musik in Geschichte und Gegenwart.* Sachteil. 3, 292-294 (Kassel: Bärenreiter)

（博士課程 1 年　ファゴット）